武蔵野日曜聖書講筵

テモテ後書の本質

――テモテ後書――

１９９２年７月19日
小池辰雄

全身的な感激性　命懸けの仕事　キリストという平安　絶信の信　霊生の霊止　キリストは最大の戦士　王者であり祭司　汝知りたもう　神に圧倒されて　福音の冠　孤軍万軍

【テモテ後1】

1神の御意により、キリスト・イエスにある生命の約束に循いて、キリスト・イエスの使徒となれるパウロ、2書を我が愛する子テモテに贈る。願くは父なる神および我らの主キリスト・イエスより賜う恩恵と憐憫と平安と、汝に在らんことを。

3われ夜も昼も祈りの中に絶えず汝を思いて、わが先祖にならい清き良心をもて事うる神に感謝す。4我なんじの涙を憶え、わが歓喜の満ちん為に汝を見んことを欲す。5是なんじに在る虚偽なき信仰をおもい出すに因りてなり。その信仰のさきに汝の祖母ロイス及び母ユニケに宿りしごとく、汝にも然るを確信す。6この故に、わが按手に由りて汝の内に得たる神の賜物をますます熾んにせんことを勧む。7そは神の我らに賜いたるは、臆する霊にあらず、能力と愛と謹慎との霊たればなり。8されば汝われらの主の証をなす事と主の囚人たる我とを恥とすな、ただ神の能力に随いて福音のために我とともに苦難を忍べ。9神は我らを救い聖なる召しをもて召し給えり。是われらの行爲に由るにあらず、神の御旨にて創世の前にキリスト・イエスをもて我らに賜いし恩恵に由るなり。10この恩恵は今われらの救主キリスト・イエスの現れ給うに因りて顕れたり。彼は死をほろぼし、福音をもて生命と朽ちざる事とを明かに為給えり。11我はこの福音のために立てられて宣伝者・使徒・教師となれり。12之がために我これらの苦難に遭う。されど之を恥とせず、我わが依り頼む者を知り、且わが委ねたる者を、かの日に至るまで守り得給うことを確信すればなり。13汝キリスト・イエスにある信仰と愛とをもて、我より聴きし健全なる言の模範を保ち、14かつ委ねられたる善きものを、我等のうちに宿りたもう聖霊に頼りて守るべし。

15アジヤに居る者みな我を棄てしは汝の知る所なり、その中にフゲロとヘ

ルモゲネとあり。16願わくは主オネシポロの家に憐憫を賜わんことを。彼はしばしば我を慰め、又わが鎖を恥とせず。17そのロマに居りし時には懇ろに尋ね来りて、遂に逢いたり。18願わくは主かの日にいたり主の憐憫を彼に賜わんことを、彼がエペソにて我に事えしことの如何許なりしかは、汝の能く知るところなり。

【テモテ後2】

1わが子よ、汝キリスト・イエスにある恩恵によりて強かれ。2且おおくの証人の前にて、我より聴きし所のことを他の者に教え得る忠実なる人々に委ねよ。3汝キリスト・イエスのよき兵卒として我とともに苦難を忍べ。4兵卒を務むる者は生活のために纏わるる事なし、これ募れる者を喜ばせんとすればなり。5技を競う者、もし法に随いて競わずば冠冕を得ず。6労する農夫まず実の分配を得べきなり。7汝わが言う所をおもえ、主なんじに凡ての事に就きて悟を賜わん。8わが福音に云える如く、ダビデの裔にして死人の中より甦えり給えるイエス・キリストを憶えよ。9我はこの福音のために苦難を受けて悪人のごとく繋がるるに至れり、然れど神の言は繋がれたるにあらず。10この故に我えらばれたる者のために凡ての事を忍ぶ。これ彼等をして永遠の光栄と共にキリスト・イエスによる救を得しめんとてなり。11ここに信ずべき言あり『我等もし彼と共に死にたる者ならば、彼と共に生くべし。12もし耐え忍ばば彼と共に王となるべし。若し彼を否まば、彼も我らを否み給わん。13我らは真実ならずとも、彼は絶えず真実にましませり、彼は己を否み給うこと能わざればなり』

14汝かれらに此等のことを思い出さしめ、かつ言争する事なきよう神の前にて厳かに命ぜよ、言争は益なくして聞く者を滅亡に至らしむ。15なんじ真理の言を正しく教え、恥ずる所なき労働人となりて神の前に練達せる者とならんことを励め。16また妄りなる虚しき物語を避けよ。かかる者はますます不敬虔に進み、17その言は脱疽のごとく腐れひろがるべし、ヒメナオとピレトとは斯のごとき者の中にあり。18彼らは真理より外れ、復活ははや過ぎたりと云いて、或人々の信仰を覆えすなり。19されど神の据え給える堅き基は立てり、之に印あり、記して曰う『主おのれの者を知り給う』また『凡て主の名を称うる者は不義を離るべし』と。20大なる家の中には金銀の器あるのみならず、木また土の器もあり、貴きに用うるものあり、また賤しきに用うるものあり。21人もし賤しきものを離れて自己を潔よくせば貴きに用いらるる器となり、浄められて主の用に適い、凡ての善き業に備えらるべし。22汝わかき時の慾を避け、主を清き心にて呼び求むる者とともに、義と信仰と愛

と平和とを追い求めよ。23愚かなる無学の議論を棄てよ、これより分争の起こるを知ればなり。24主の僕は争うべからず、凡ての人に優しく能く教え忍ぶことをなし、25逆う者をば柔和をもて戒むべし、神あるいは彼らに悔改むる心を賜いて真理を悟らせ給わん。26彼ら一度は悪魔に囚われたれど、醒めてその羂をのがれ、神の御心を行うに至らん。

【テモテ後3】

1されど汝これを知れ、末の世に苦しき時きたらん。2人々おのれを愛する者・金を愛する者・誇るもの・高ぶる者・罵るもの・父母に逆うもの・恩を忘るる者・潔からぬ者、3無情なる者・怨を解かぬ者・讒る者・節制なき者・残刻なる者・善を好まぬ者、4友を売る者・放縦なる者・傲慢なる者・神よりも快楽を愛する者、5敬虔の貌をとりてその徳を捨つる者とならん、斯る類の者を避けよ。6彼らの中には人の家に潜り入りて愚かなる女を虜にする者あり、斯くせらるる女は罪を積み重ねて各様の慾に引かれ、7常に学べども真理を知る知識に至ること能わず。8彼の者らはヤンネとヤンブレとがモーセに逆いし如く、真理に逆うもの、心の腐れたる者、また信仰につきて棄てられたる者なり。9されど此の上になお進むこと能わじ、そはかの二人のごとく彼らの愚かなる事も亦すべての人に顕るべければなり。10汝は我が教誨・品行・志望・信仰・寛容・愛・忍耐・迫害、および苦難を知り、11またアンテオケ、イコニオム、ルステラにて起こりし事、わが如何なる迫害を忍びしかを知る。主は凡てこれらの中より我を救い出したまえり。12凡そキリスト・イエスに在りて敬虔をもて一生を過ごさんと欲する者は迫害を受くべし。13悪しき人と人を欺く者とは、ますます悪にすすみ、人を惑し、また人に惑されん。14されど汝は学びて確信したる所に常に居れ。なんじ誰より之を学びしかを知り、15また幼き時より聖なる書を識りし事を知ればなり。この書はキリスト・イエスを信ずる信仰によりて救に至らしむる知慧を汝に与え得るなり。16聖書はみな神の感動によるものにして、教誨と譴責と矯正と義を薫陶するとに益あり。17これ神の人の全くなりて諸般の善き業に備えを全うせん為なり。

【テモテ後4】

1われ神の前また生ける者と死にたる者とを審かんとし給うキリスト・イエスの前にて、その顕現と御国とをおもいて厳かに汝に命ず。2なんじ御言を宣べ伝えよ、機を得るも機を得ざるも常に励め、寛容と教誨とを尽して責め、戒め、勧めよ。3人々健全なる教えに堪えず、耳痒くして私慾のままに己がために教師を増加え、4耳を真理より背けて昔話に移るとき来らん。5され

ど汝は何事にも慎み苦難を忍び、伝道者の業をなし、なんじの職を全うせよ。
6我は今供物として血を灑がんとす、わが去るべき時は近づけり。7われ善き戦闘をたたかい、走るべき道程を果たし、信仰を守れり。8今よりのち義の冠冕わが為に備われり。かの日に至りて正しき審判主なる主、これを我に賜わん、ただに我のみならず、凡てその顕現を慕う者にも賜うべし。
9なんじ勉めて速かに我に来れ。10デマスは此の世を愛し、我を棄ててテサロニケに往き、クレスケンスはガラテヤに、テトスはダルマテヤに往きて、11唯ルカのみ我とともに居るなり。汝マルコを連れて共に来れ、彼は職のために我に益あればなり。12我テキコをエペソに遣せり。13汝きたる時わがトロアスにてカルポの許に遺し置きたる外衣を携えきたれ、また書物、殊に羊皮紙のものを携えきたれ。14金細工人アレキサンデル大に我を悩ませり。主はその行為に随いて彼に報いたもうべし。15汝もまた彼に心せよ、かれは甚だしく我らの言に逆いたり。16わが始の弁明のとき誰も我を助けず、みな我を棄てたり、願くはこの罪の彼らに帰せざらんことを。17されど主われと偕に在して我を強めたまえり。これ我によりて宣教の全うせられ、凡ての異邦人のこれを聞かん為なり、而して我は獅子の口より救い出されたり。18また主は我を凡ての悪しき業より救い出し、その天の国に救い入れたまわん。願くは栄光、世々限りなく彼にあらん事を、アァメン。
19汝プリスカ及びアクラ、またオネシポロの家に安否を問え。20エラストはコリントに留れり。トロピモは病ある故に我かれをミレトに遺せり。21なんじ勉めて冬のまえに我に来れ、ユブロ、プデス、リノス、クラウデヤ、及び凡ての兄弟、なんじに安否を問う。
22願わくは主なんじの霊と偕に在し、御恵なんじらと偕に在らんことを。

●全身的な感激性

賀川豊彦という方は本当にキリストに酔ったひとです。キリストに圧倒され、酔っている。それでなければ、あんな行動はできない。賀川さんは、もっともパウロに近いひとだ。パウロは本当にキリストにとっ捕まって、完全にキリストで動いていた。

賀川豊彦の詩（「賀川豊彦　福音の身証者」）を載せた『エン・クリスト』51号（１９９２年7月夏季号）を読んで、

「いやぁ、本当に参った」

と、どの召団からも何も言ってこない。私はもう召団を止めようかと思ってる。そんな感激性のないことは、もう嫌だからね、僕は。私は召団をいつでも投げ出しますから。いい加減な人たちとはやりたくない。何も言ってこないから感激性がない、とは必ずしも言え

ませんけれども。しかしだね、こちらは命懸けで書いたんだよ、あれを。本当に平伏して書いた。そういう文字に対して、感激性がない。私は、藤井先生の書いたもので、感激した時は、必ず藤井先生にお手紙を書きました。

何しろ、今の世の中は感激性が非常に乏しい。福音に対する全身的な感激性がなくて、何が福音か。皆さんはその角度から協力してくださっていると、私は信じますけれども。烈々たる魂でやってくださいよ。私は百才まで必ずやりますから。死ぬわけにいかん。

今度の、『使徒らの昔を慕ひて』（独和対照、１９９２年７月刊）も、読ませたい人があったら、どうぞ勧めてやってください。もっと動的でなければダメですよ、皆さん。福音の世界は、自分たちがただ満足しているということではないですから。

●命懸けの仕事

今日は、テモテ後書を全部、その中の本質を私はつかまえてお話したい。

パウロはまた二度目にテモテに書いた。テモテのことを「わが子」とまで言っている。この師弟の関係が本当に

「われ汝、汝われ」

という、非常に一つの関係になって、

「キリストのために苦難を共にする。しっかりやってくれ」

と、テモテに言っているわけです。友情であろうと、また師弟の関係であろうと、

「この人のためには生命も棄てる」

というような気合が大事なんです。

「友のために生命を棄つる。これより大いなる愛はなし」

とキリストが言っておられるが、そういう気合の交わりでなかったら、福音のために本当に一緒にやっていけない。福音というのは命懸けの仕事なんだから。体裁ではないんだ。テモテ前後書の気合はそこにある。

「私は命懸けでやっている。お前も命懸けでいけ。しかも、お前と私の間は、お互いに命懸けだ」

ということです。

賀川さんのあの伝道も全く命懸けの伝道です。あの貧民窟をみて、

「そこを私は第二の故郷とする」

と、誰もそのような表現をした人はない。彼は第二の故郷としてそこに住み込んだ。しかも一番ひどい部屋に住み込んだ。殺人の血が飛び散っている壁の部屋の中に。キリストの棄身の愛でなければそんなことはできない。単なる「愛」なんていう言葉でも表せないくらいです。その代わり、キリストに酔うようなキリストと本当に一つになっている境地はもの凄く強い。何ものにも負けない。百難を突破できます。これは本当に聖霊の力なんです。

「**火を投ぜんために**」

と、キリストが言ったでしょ。烈々たる火ですから、この聖霊の世界は。我々の信交は上昇カーブですから、歳なんか問題でない。普通の信仰は下降カーブで、終りはみんなダメです。聖書の研究で聖書の世界に入れるか。パウロの手紙なんてものは、研究されて読まれるような手紙ではないですから。

●キリストという平安

テモテ後書1章に入ります。

1神の御意(みこころ)により、キリスト・イエスにある生命(いのち)の約束に循(したが)いて、キリスト・イエスの使徒となれるパウロ、2書(ふみ)を我が愛する子テモテに贈る。願くは父なる神および我らの主キリスト・イエスより賜う恩恵(めぐみ)と憐憫(あわれみ)と平安と、汝に在らんことを。

「キリスト・イエスにある生命の約束」とは、「永遠の生命の約束」だ。約束ばかりでなくて、既に現実に来ているんだけれども。「我が愛する子テモテに贈る」と書いてある。

「**キリスト・イエスより賜う恩恵と憐憫と平安と、汝に在らんことを**」

と。この一つ一つの言葉が非常に重みがある。

「キリストという恩恵、キリストという憐憫(あわれみ)、キリストという平安」

です。概念ではない。この言葉自身がもうキリストなんです。キリスト自身が恩恵の実体、憐憫の実体、平安の実体だから。

「**父の憐憫(あわれみ)あるごとく、汝らも憐憫あれ**」

という。相手を荷ない上げる、その力がこの「憐憫」です。「平安」というのは、神さまと一つになっているその力強い事態が平安です。我々が「キリストと一つとなっている」ことが本当の平安です。私は手紙の表に必ず「平安」と書く。それは、

「あなたに本当に平安があるように。キリストと一つとなっている現実であるように」

という気持で書く。私が「祈る」と書けば、必ずその瞬間に祈っている。私はペンを置いて必ず祈る。でなければ、「祈ります」なんていうのはウソになる。キリストの世界はごまかしがきかない。キリストをごまかしたり、自分をごまかしたりして、何になるか。

3われ夜も昼も祈りの中に絶えず汝を思いて、わが先祖にならい清き良心をもて事(つか)うる神に感謝す。

素晴らしいね。パウロはテモテだけが味方だったらしい。小アジア半島を随分伝道されたが、

「結局、棄てられた」

と書いてある。「棄てられた」ということは、またユダヤ教が入ってきて、ひっくり返して

しまったんだ。せっかくのパウロの福音がまた元へ戻ってしまった。今のユダヤ人がそうだ。いつまでたっても、キリストとパウロを受けとらない。キリストの十字架なんてものは大変なものです。

4**我なんじの涙を憶え、わが歓喜の満ちん為に汝を見んことを欲す。**5**是なんじに在る虚偽なき信仰をおもい出すに因りてなり。その信仰のさきに汝の祖母ロイス及び母ユニケに宿りしごとく、汝にも然るを確信す。**

テモテのお祖母さん、お母さんは非常に信仰が深かった。テモテはそれを受け継いでいる。女性の魂は非常に大事なんです。その子供に伝わっていくから。だから、日本でも女子教育は非常に大事なんだが、本当に女子教育のできるような先生も校長もほとんどいないだろうね。第二の国民を造るのは女の人たちなんです。

だから、私ははっきり書いたでしょ。賀川さんのお母さんは芸者で妾だった。けれども、この女性が素晴らしかったから、そこで賀川さんが現れた。私はそれをすぐ直感した。彼の伝記を見てたらやっぱりその女性はその通り素晴らしい女性であった事が書いてあった。

●絶信の信

パウロはテモテには特に按手した。

6**この故に、わが按手に出りて汝の内に得たる神の賜物をますます熾んにせんことを勧む。**

「按手でもって御霊と賜物がお前の中に豊かに来た。祈りをもっていよいよ素晴らしくなれよ」

と。

7**そは神の我らに賜いたるは、臆する霊にあらず、能力と愛と謹慎との霊たればなり。**

だからパウロは、

「聖霊は能力と愛と謹慎との霊である」

と言う。正に力、深い愛です。「つつしみ」という言葉は弱い。私に言わせれば、「平伏し」です。平伏しの霊である。神・キリストの前に平伏さないような者は聖霊を受けとることができない。

「信仰、信仰」なんていうが、信仰という言葉が一般に躓きになっている。キリストの言葉にまた躓いている。

「汝の信仰、汝を救えり」

「信仰薄きものよ」

なんてキリストがおっしゃるものだから。ああいうキリストの言葉に躓いたらダメです。

「私は信仰なんかありません。絶信の信です。信はあなたから戴いています。それ

が力強いんです。私は何もありません」
ということです。あなた方、どうなんですか。
「小池先生はなぜ元気なのか？　信仰が厚いからか」
なんて、そうじゃない。信仰はひとつも厚くも薄くもない。信仰なんか問題にしてないんだから。
「絶信の信」
というような言葉を誰も言わないね。本当だから仕方がない。だから、無なんだ。即、無限無量の世界に入る。「十字架」の無、「聖霊」の無限無量です。だから、
「十字架と聖霊は分けるわけにはいかない」
と私は言っている。

8 されば汝われらの主の証をなす事と主の囚人たる我とを恥とすな、ただ神の能力に随いて福音のために我とともに苦難を忍べ。

「自分はキリストの囚人だ」
と。「使徒」という言葉でもないんだ。囚人が本当の自由なんです。キリストに囚われていれば、本当の自由、自由無礙、自由自在です。そんな自由は普通の人たちは持たない。マルチン・ルターが言った「クリスチャンの自由」とはこの自由なんです。
「キリストに囚われている」
ということ。あれが宗教改革になった。

●霊生の霊止

10 この恩恵は今われらの救主キリスト・イエスの現れ給うに因りて顕れたり。彼は死をほろぼし、福音をもて生命と朽ちざる事とを明かに為給えり。

キリストは甦って、霊生を、霊的な生命を現して、ローマの兵隊がびっくりしてしまった。そういう霊止なんだから。四十日間、弟子たちに現れた。戸が閉まっていたってその中に入って来る。そのキリストが、

「食べ物があれば食べるぞ、私は幽霊ではないぞ」

と。大変な現実だよ、これは。あれはみんな本当ですよ。
だから、今もなお生きて、あなた方に自由に御霊のキリストとして働きたもう。いついずこにおいても。どこかの会堂でも何でもない。至る処これキリストの会堂です。聖霊が働く所は、
「至る処これ神殿なり」
ということだ。

13 汝キリスト・イエスにある信仰と愛とをもて、我より聴きし健全なる言の模範を保ち、14 かつ委ねられたる善きものを、我等のうちに宿りたもう聖霊

に頼りて守るべし。

懇ろに書いているね。

15**アジヤに居る者みな我を棄てしは汝の知る所なり、**

「みんな結局私を棄てた。伝道はみんな効果がなかったよ」

と。パウロを棄てたのではない。結局、キリストを棄てたわけだ。福音を棄てた。福音を棄てたら、行くところはもう決まっている。

●キリストは最大の戦士

テモテ後書2章です。

1**わが子よ、汝キリスト・イエスにある恩恵（めぐみ）によりて強かれ。**2**且おおくの証人の前にて、我より聴きし所のことを他の者に教え得る忠実なる人々に委ねよ。**3**汝キリスト・イエスのよき兵卒として我とともに苦難（くるしみ）を忍べ。**

大事な言葉です。「戦士、兵卒だ」と。女の方でも男の人でもキリストの戦士です。

ドイツの或る婦人がある。ヒトラーが

「あれはけしからん、殺せ」

と、ヒトラーの兵士がその女の人をピストルで撃ちに行った。ところが、その女の人につくわしたら、彼女は光を放っている。神々しい。キリストの光で。それで、ピストルが撃てない。

「殺してきました」

と嘘を言って報告した、という。その女の人は本当にキリストの兵卒です。戦士、ジャンヌ・ダルクみたいに。

とにかく、本当に祈り入って、上から力が来て、熱くなったら、あなた方、みんな病気なんかどこかへいってしまうよ。病いがとっつかない。

「先生は風邪をひかないですか？」

と聞かれると、

「いや、風邪のほうで逃げていくよ」

と言うんだ。

あなた方、黙って祈る時に、グーッと力が来ますか、熱くなりますか。本当にキリストの中に入らなければダメだよ。

棄てられるのが本当なんだ。福音は棄てられる。いいんだ、それで。私はクリスチャンに棄てられる。クリスチャンの敵はクリスチャンなんだ。

「よく戦い」という。パウロが、

「信仰の善き戦いを戦え」

なんて言っているものだから。そして、ちょっと英雄気取りになる。気取りではない。空

元気はダメだ。本当の戦いの力は聖霊ですから。聖霊がない者は戦えない。

楠木正成（くすのきまさしげ）は、

「天皇のために、自分は七度び生まれかわっても、天皇を守る」

という。我々はあの正成の魂をもって、

「キリストに本当に仕え、キリストのために戦っているか」

ということ。

3 **汝キリスト・イエスのよき兵卒として我とともに苦難（くるしみ）を忍べ。**

と。キリストは最大の戦士です。天界にいきなり行ける人が、天の万軍を呼べばローマの兵隊なんかひっくり返すことのできる人が、十字架にかかって贖罪をした。最大の勇者です。キリストほどの勇者はいない。

●王者であり祭司

8 **わが福音に云える如く、ダビデの裔（すえ）にして死人の中より甦え給えるイエス・キリストを憶（おぼ）えよ。**

「死人の中より甦え給える」

という言葉がよく出てくる。「イエス・キリストを憶えよ」どころではない。

「イエス・キリストと一つとなって行け」

ということです。パウロはなぜまた「憶えよ」なんてことを言うかと思う。

9 **我はこの福音のために苦難を受けて悪人のごとく繋（つな）がるるに至れり、然れど神の言は繋がれたるにあらず。**

9節は大事な節です。身体はとっ捕まっているけれども、神の言は自由自在だ、魂は自由自在だ、と。そして、時には鎖がとれてしまう。皆さんは

「自分はまだ信仰が…」

なんて、そんなことを思わないでくださいよ。キリストの十字架でゼロにされている現実を、根源現実を本当に受けとってごらん。グーッと力が来るから、聖霊の。それでいきなさいよ。力も智慧もくる。創造的になる。インスピレーションが来る。

11 **ここに信ずべき言あり『我等もし彼と共に死にたる者ならば、彼と共に生くべし。** 12 **もし耐え忍ばば彼と共に王となるべし。若（も）し彼を否（いな）まば、彼も我らを否み給わん。**

「王」というのは、

「本当に自由な人、何者にも支配されない」

という意味です。神の僕は本当の王者なんです、本当の自由者なんです。

「王者とは自由無礙なるひと」

ということです。

ルターはあの『クリスチャンの自由』にそのことも書いている。そして、もう片一方は「祭司」です。王に対しては祭司である。坊さんである。坊さんであるということは、人のために執成すということです。力ある執成しができる。

「本当のクリスチャンは王者であり、祭司である」

ということ。パウロの書簡の中から、それをルターが掴みだして書いている。

●汝知りたもう

賀川さんは英語がもの凄く達者だった。ドイツ語だってもちろん後からお読みになったんでしょうけれども。なにしろ、中学校の時にもう既に、カント、ヘーゲル、ショーペンハウェルなんてのを英語で読んでいたのだから。あの人は大変な人だ、知識の上でも。自然科学の方でも。正直、賀川さんという人は大変な人だといいたい。あれだけの血みどろの生活をしながら、読むものはちゃんと読んでいる。それも全部それを、博覧強記だから、覚えている。記憶力もいい。正直、大変なひとだ。とても真似はできない。人真似はしないほうがいい。ただ、彼の生き方そのものを、自分としてはどういう生き方で現すか、と。一人一人の生き方というものはそれぞれでいい。ただ、本当にいつわりなくキリストを証する生き方をしなかったなら、もったいない。

あなた方、いろんな人と話しても、脱線して、最後には福音のことを率直に語るんだよ。私は自然にそうなってしまう。

「この世界に来てごらんなさい。行き詰まりを知りませんよ」

と。運命環境はどうでもいいよ。いろんなことが不如意で、うまくいかなければいかないほど、逆に聖霊は働く。いいですか。だから「行き詰まらない」と言ってるんです。「行き詰まらない」どころの騒ぎではない。御霊はいよいよ働く。

15 **なんじ真理の言を正しく教え、恥ずる所なき労働人（はたらきびと）となりて神の前に練達**
せる者とならんことを励め。16 また妄（みだ）りなる虚（むな）しき物語を避けよ。かかる者
はますます不敬虔に進み、17 その言は脱疽（だつそ）のごとく腐れひろがるべし、ヒメ
ナオとピレトとは斯（かく）のごとき者の中にあり。18 彼らは真理より外（はず）れ、復活（よみがえり）は
はや過ぎたりと云いて、或人々の信仰を覆（くつが）えすなり。19 されど神の据え給え
る堅き基（もとい）は立てり、之に印（しるし）あり、記して曰（い）う『主おのれの者を知り給う』ま
た『凡て主の名を称うる者は不義を離るべし』と。

「主おのれの者を知り給う」

と。あなた方一人一人は知られている。コリント前書13章にも出ている。

「汝知りたもう」

と、それでいいんだ。人にどう思われようと、どう誤解されようと、一向差し支えない。「汝知りたもう」でいい。

「われ、汝を知る」

と、キリストはおっしゃる。「知る」という言葉と「愛する」という言葉は離すことのできない言葉です。「分かる」なんていうのではないから、この「知る」というのは。

「全存在を深い愛をもって取り扱う」

ことが、「知る」ということです。

22 **汝わかき時の慾を避け、主を清き心にて呼び求むる者とともに、義と信仰と愛と平和とを追い求めよ。**

「平和」ではない、「平安」です。キリストの愛をいただいている所に「平安」があり、キリストの愛をいただいている所に「信仰」がある。キリストとの関係が縦につながっているのが「義」ですから。要するに、こんな言葉はみんな一つの事態をいろいろな角度から言っているだけの話です。四つのことではない。真理というのはちゃんと有機体的に連なっている。一つの中心をもつと、それは楽にとれる。

「分析して、どうこれが連なっているか総合しよう」

なんて、分析・総合ではいつまでたってもダメだ。分析・総合は研究の態度。内観・直観は一如の世界から限りなく展開していく。

●神に圧倒されて

テモテ後書3章です。

10 **汝は我が教誨（おしえ）・品行・志望（こころざし）・信仰・寛容・愛・忍耐・迫害、および苦難を知り、**

要するに迫害される。それは本ものの世界はみんなこんなになってしまう、ということです。

12 **凡そキリスト・イエスに在りて敬虔をもて一生を過ごさんと欲する者は迫害を受くべし。**

はい、その通り。「敬虔」という言葉と「信仰」という言葉は同じです。迫害を受けないで、人から「あの野郎は」と棄てられるようなことでないのは、「いい加減で生きている」ということになる。本当の生き方をしていると、そういうものにぶつかる。

けれども、人は、本ものの力と、それから本ものの愛、それには何か感ずるんです。迫害していながら。

「何か、あの人は違う」

と。人間はそれを誤魔化している、悪いやつは。

16 **聖書はみな神の感動によるものにして、教誨（おしえ）と譴責（いましめ）と矯正（きょうせい）と義を薫陶（くんとう）するとに益あり。** 17 **これ神の人の全くなりて諸般（もろもろ）の善き業に備えを全うせん為なり。**

全くそうです。神に圧倒されて書いているものだから。

一番大事なのは第４章の前半、８節までなんです。

●福音の冠

テモテ後書４章です。

1 われ神の前また生ける者と死にたる者とを審かんとし給うキリスト・イエスの前にて、その顕現と御国とをおもいて厳かに汝に命ず。2 なんじ御言を宣べ伝えよ、機を得るも機を得ざるも常に励め、寛容と教誨とを尽して責め、戒め、勧めよ。3 人々健全なる教えに堪えず、耳痒くして私慾のままに己がために教師を増加え、4 耳を真理より背けて昔話に移るとき来らん。5 されど汝は何事にも慎み苦難を忍び、伝道者の業をなし、なんじの職を全うせよ。

パウロは散々戦いました。だから、６節で、

6 我は今供物として血を灑がんとす、わが去るべき時は近づけり。

「いよいよ殉道の時は近づいた」と。

7 われ善き戦闘をたたかい、走るべき道程を果し、信仰を守れり。8 今よりのち義の冠冕わが為に備われり。かの日に至りて正しき審判主なる主、これを我に賜わん、ただに我のみならず、凡てその顕現を慕う者にも賜うべし。

「かの日」とはキリストの再臨の日です。

「キリストの再臨は近い」

としている。「義の冠」なんていう言い方をしている。冠なんかどうでもいい。パウロはよくこういう表現をする。

「もうキリストの力で、キリストに囚われて、私はさんざん戦いました。供物として血を注がんとしている。キリストの十字架の後を行きます。去るべき時は近づいた」

と。「義の冠」の義はロマ書の、

「神の義は福音のうちに現れた」

という義です。この「義の冠」は別な意味で言うと「福音の冠」でもいい。ユダヤ人は非常に「義」という言葉を使う。義は聖書の脊椎骨だから。新約の義は旧約の義とは違う。この義は審く義ではない。「人を救う義」なんです。

「十字架が義であり、愛である」

というのは、義と愛とは離すことができない。

●孤軍万軍

この新約聖書の真理――新約聖書というのは大した頁数ではない。この無駄のない真理――これが人類の歴史の終りに至るまで、新約聖書は万巻の書中の書だ。とにかく、新約

聖書は、しょっちゅうハンドバックに入れたり、カバンに入れて、機がある時に開いて読みなさい。ラインをひっ張って。そうすると、それで力が来るから。読めば直ちに力がくる。読むことが直ちに祈りである。そういうクリスチャンにならなければ、つまらないよな。

「ご飯を食べなくても、新約聖書をくらっていれば、一日水だけを飲んでいれば、それで良かったです」

なんて、いくらでもできますよ。

16 **わが始の弁明のとき誰も我を助けず、みな我を棄てたり、願くはこの罪の彼らに帰せざらんことを。**

「誰も味方をしてくれなかった。みんな私を棄てたけれども、そんなことはどうでもいいよ」と。

17 **されど主われと偕に在(いま)して我を強めたまえり。これ我によりて宣教の全うせられ、凡ての異邦人のこれを聞かん為なり、而して我は獅子の口より救い出されたり。**18 **また主は我を凡ての悪しき業より救い出し、その天の国に救い入れたまわん。願くは栄光、世々限りなく彼にあらん事を、アァメン。**

それから、プリスカとアクラとオネシポロに懇ろに語って、よろしく言ってくれ、と。

要するに、パウロは本当に戦いぬいた。そしていよいよ最後には、

「自分は血を注ぐ」

と。これがテモテ後書の彼の中心の気持です。そして、

「お前も、そのように戦ってくれ」

とテモテに言う。

「孤軍万軍」

と私は言います。天の万軍、使徒たち、それが味方をしてくれるから、こちらは「孤軍」でひとつも寂しくもなければ弱くもない。本当の力がきている。これは本当だから、しょうがない。孔子が、

「千万人といえども我往かん」

（自ら反(かえり)みて縮(なお)くんば、千万人と雖も、吾往かん）

と言ったが、孔子の言葉をそのまま言えます。あなた方一人一人がそれだけの存在です。いいですか。この福音を受けとったら、天下無敵ですから。

我々は、あなた方一人一人が、パウロからそのように期待されている。テモテ前後書の根本精神は、そういうところにある。あなた方一人一人がテモテになって、キリストの戦士、福音の戦士である。相手を救わんがための戦いです。サタンには絶対に負けない。キリストの力ですから。